

「種子ってすごい！」種子への関心を高める導入

(1) 教材との出会い

他の教科でも同じことが言えますが、単元の導入は授業者や子供たちにとって、特に大切にしたい時間だと思います。その中で理科では、自然の事物・現象に出会い、子供たちが疑問や驚きなどを感じ、単元を通す学びの原動力を得るような学習活動を展開することが求められています。

本単元においては、植物の発芽、成長、結実について、それらの仕組みを理解するとともに、生命を尊重する態度を育てることもねらいとしています。「植物」については1, 2年の生活科, 3, 4年の理科とともに、学習の内容が位置づけられて学習が展開されますが、教育活動以前に植物はわたしたちの生活にとって大変身近なものと言えらると思います。どの子供にとっても、想起しやすいものだと思います。そこに疑問や驚きを子供たちに感じて欲しいために、以下のような提案をしたいと思います。

(2) 種子のエピソード紹介

種子はわたしたちの生活にとって身近な存在であるために、種子を見たことがない子供はいないと思います。アサガオ、ヒマワリ、ホウセンカ、ヒヤクニチソウ…これまでの学習を通して、いくつかの種子に必ず出会っていることだと思います。でも、あんな小さな粒に生命が宿っていて、芽を出すことに驚きや不思議、神秘さえも感じさせられたらと思います。

種子にまつわるエピソードの紹介を提案します。

- ・2000年のねむりから目覚めたハスの種子（「新しい理科5」東京書籍より）
- ・3000年以上前のツタンカーメン副葬品から発見されたエンドウ豆
- ・10000年という太古の眠りから目覚めたルピナスの種子 など

とてつもない時間を超えて現代のわたしたちと出会った種子たちが、芽を出し、根、茎、葉を形づくり、見事に花をさかせ実に結びつけたというエピソードです。小さな種子に秘められた大きな力を感じて欲しいと思います。そして、それらの種子が目覚めるためには、きっかけ、条件があったことに気付かせます。その条件について考えることで、「種子の発芽の条件」へと結びつけていくのです。これまで何気なく見過ごしていた種子が、ちょっと違って見えることと思います。また、わたしたちの食卓には、「種子」が数多くあることに気付かせることも大切だと思います。主食(米、麦など)はそのほとんどが種子そのものですし、副菜やおやつとして食べているものにも、種子そのものが数多くあります。それらに気付かせ、改めてわたしたちの生活を見直すことが、理科では特に大切だと思うのです。



種子のエピソードを紹介する執筆者



ルピナスの花を見つめる子供たち